

2015年10月から1年半お世話になった土屋毅明氏の厩舎を離れ、2017年6月1日から William Fox-Pitt 氏が代表を務める Fox-Pitt Eventing に拠点を移しました。William Fox-Pitt 氏は総合馬術界屈指のトップライダーであり、アテネオリンピックで団体銀、北京オリンピックで団体銅、ロンドンオリンピックで団体銀と3つのメダルを獲得している他、世界選手権で2つの個人銀メダルと団体金と銀、世界中の総合馬術選手が憧れるバドミントンで2回優勝するなどの結果を残しています。2016年のリオデジャネイロオリンピックを最後に選手としては第一線を退くという噂を耳にしたので、トレーナーとしての活動も考えているかもしれないと思って打診したところ、「今すぐに引退は考えていないが、君をサポートすることはできる」という返事をいただきました。トップライダーの活動を間近で見られるというまたとないチャンスに、思い切って土屋氏の下を離れて新しい環境に身を置くことを決断しました。

William は現在も5頭の馬を連れて1Day のホーストライアルに参加するなど、精力的に競技に出場しており、引退の噂は何だったのだらうと思えますが、日常的な馬の管理、トレーニング、競技などここで経験できる全てのことを吸収し、できるだけ多くを学んでいきたいと思えます。

## ❖ Fox-Pitt Eventing の施設

Fox-Pitt Eventing はロンドンから西に200km ほど離れた Sturminster Newton という街に広大な施設を有しています。40m×60m のメインアリーナ、20m×40m のインドアアリーナは一般的なものですが、何と言っても素晴らしいのは敷地の外周を利用してつくられている全長1km ほどの坂路です。クッション性の高いオールウェザーサンドが敷かれており、フィットネストレーニング（持久カトレニング）が必要不可欠な総合馬にとって、自厩舎でこのトレーニングが行えることはとても大きなアドバンテージです。このような坂路を有する厩舎はほとんどなく、他の厩舎から馬を連れてきてこの坂路を借りてトレーニングを行なっていることがよくあります。また、不整地での騎乗トレーニングが可能な芝馬場、広い放牧場、ウォーキングマシーンが備えられています。

## ❖ トレーニング

現在は、Vikenti と Tacoma の2頭に、新たに乗るようになった Utopia がチームに加わり合計3頭でトレーニングを行なっています。

William 厩舎では「毎日違うトレーニングを行なって馬の気持ちを新鮮に保つ」という基本プランのもと、ハック、馬場、フィットネストレーニング、障害、馬場といったように、2日続けて同じことをしないようにしています。また、トレーニングを始める前には必ず15分ほど街の路地を散歩します。

これはトレーニングを始める前に、馬場以外の場所を歩くことで「よし、今日も頑張ってトレーニングしよう」という気持ちの準備をさせることが目的です。William は「人間も、朝起きて部屋を出た瞬間に、そこが学校の教室だったら嫌だろう？ 学校に向かう通学路で気持ちの準備をするから、頑張って学校で勉強できるということじゃないかな」と話してくれました。また、トレーニング前に体がほぐれること、硬い場所を歩くことで関節の可動域が広がることなど、様々なメリットがあることを感じています。

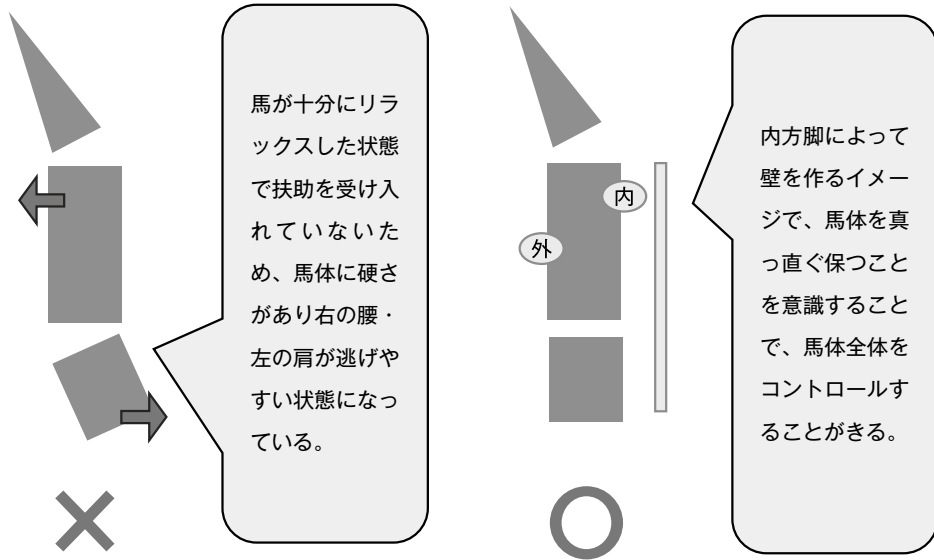
William は「私のやり方は古いかもしれないけれど、私はこれが好きだ。ただ、私の考え方が正解だとは思っていない。様々な考え方があるべきだし、君が信じている方法や考え方があるならそれを否定するつもりはない」と言ってくれます。そして、私の考えや感覚を尊重しつつ、彼の考えや方法をアドバイスしてくれています。このような考え方は指導者という立場で考えてもとても大切だと感じています。

実際のトレーニングの内容は特別変わったものではなく、ベーシックなものです。ただ、その中で、William は「Good suppleness」という言葉をよく口にします。これは「良い柔軟性」つまり馬がリラックスした状態で柔らかく動いていることを指しています。やや低めの体勢をベースとして、収縮運動の後や馬の頭が高い位置で運動している最中にも、常にリラックスしていつでも低めの体勢に戻れるかどうかを確認するようにと言われます。ここで言う「低めの体勢」とは、馬のバランスが保たれた中で、項がき甲よりもわずかに高い位置の体勢であり、決して馬の重心が前肢にあるような前バランスというわけではありません。競技で馬場馬術を行う時はこの低めの体勢では不十分ですが、収縮を求めるためにも馬がリラックスしていることは大前提であり、柔軟性が確認できてからアップヒルの体勢を求めるべきだとアドバイスを受けました。

その「良い柔軟性」を確認する一つの基準として「反対駢歩の反対姿勢」を取り入れています。たとえば左回りをしている時に、右手前の駢歩で左内方姿勢を要求するということです。その際に気を付けなければならないのは、馬体を真っ直ぐに保つことです。体の硬い馬や、緊張してしまっとうまく自分の体をコントロールできない馬は、右ページの図の左のような体勢になったり駢歩の手前を変えたりしてしまうかもしれません。私がトレーニングを行なっている Vikenti も、繊細で緊張しやすい性格なので、手前を変えたり、腰が残って左の方が逃げたりという失敗を繰り返し、図の右のような体勢をとれるようになるのに数日かかりました。しかし、これはあくまでも馬体の柔軟性とリラックスを確認するための手段であり、「反対駢歩の反対姿勢」が目的になってはいけません。これをさせるために馬に無理な要求をして緊張させ、馬が体を硬くするのは本末転倒になってしまいます。

## 反対駆歩の反対姿勢とその注意点

### 左周りで右手前駆歩左ベンドを要求した場合



た箇所を反省して次回に向けて改善することは大切ですが、実際の競技では苦手の項目を無難に終わらせるよりも、得意な項目で点を稼ぐことを考えて、とにかくポジティブに騎乗すべきであるということです。今回出場した競技は、世界選手権の出場基準のクオリファイは関係ないものだったので、失敗を恐れずポジティブに演技したところ、結果的に大きな失敗はなく、これまで以上に納得のいく内容と点数を得ることができました。

クロスカントリーも同様にポジティブな走行を心

## ❖ 競技会

6月初めに厩舎を移り、2週目の週末には早くも Tacoma でインターナショナル競技に出場しました。William がクロスカントリーコースと一緒に歩いてくれたのですが、そこで新しい発見がありました。それは「簡単な下見は簡単な気持ちを生み出し、シンプルな走行を築く」ということです。William の下見は極めてシンプルで「良いリズム、十分なエネルギー、アタック！」という言葉を繰り返し言われました。今回のコースにそれほど難しいコンビネーションがなかったこと、英語ができない私のためにシンプルな言葉で説明してくれたことはあったと思います。しかし、私はこれまで「この障害にどうアプローチするか」「どのあたりからバランスバックを始めるか」「その時自分の体や拳はどのポジションにあるべきか」など、いろいろなことを意識して下見をしなければならなかったと考えていたのですが、そのような指示は一切ありませんでした。そのうちに「今までの下見は深く考え過ぎだったのだろうか」という気持ちになり、さらに「きっとこの障害はそこまで深く考える必要はないのだろう」と、前向きに考えるようになりました。実際、馬自身が自信をもってスムーズに通過してくれ、これまでの自分は複雑に考え過ぎていて、本当はもっとシンプルな走行で良かったのだということを感じました。

7月に入り Tacoma と Vikenti の2頭で CIC2\*（現 CCI3\*-S）に出場しました。ここでもまた、競技に臨む姿勢において大切なことを学びました。馬場馬術競技について William から「たとえ敬礼で四肢が揃わなくてもそれがどうした？ この素晴らしいハーフパスを見てくれ！」「たとえブルーエットで後肢が止まったとしてもそれがどうした？ それ以外のペースが完璧だったじゃないか！」という前向きな気持ちで演技するように言われたのです。うまくいかなか

く掛けた結果、障害物も大きくタイムもかなり厳しいコースであったにもかかわらず、スムーズな走行をすることができ、Tacoma と Vikenti はそれぞれのクラスで5位となりました。トレーニング方法や考え方が少しずつ変化してきている中で、今回のような内容で競技を終えられたことは大きな収穫でした。

その後もほぼ2週間に1回のペースで競技に参加し、8月末の競技会では3頭の馬でそれぞれ別のクラスに出場するという初めての経験もしました。すべてがうまくいったわけではなく、クロスカントリーで拒止されてクオリファイできなかったこともありましたが、それらの経験を無駄にすることなく、今後に向けてのデータとして蓄積することができましたし、新たな方法と考え方に基いて行なってきたトレーニングの成果を感じることも増えてきました。

## ❖ 激動のシーズンラスト5週間

競技シーズン終盤の9月2週目から10月1週目にかけて、5週連続してインターナショナル競技に出場しました。火曜日早朝に厩舎を出発し、水曜日がホースインスペクション、木曜日と金曜日の2日間に分けて馬場馬術が行われ、土曜日にクロスカントリー、日曜日に障害馬術を行なって深夜に帰宅。月曜日に片付けと次の準備をして、翌朝早くに出発という生活が1ヵ月続きました。CIC2\*（現 CCI3\*-S）に Utopia、CIC3\*（現 CCI4\*-S）に Vikenti、CIC3\*（現 CCI4\*-S）のネーションズカップに Utopia、CCI2\*（現 CCI3\*-L）に Tacoma、最後に CCI3\*（現 CCI4\*-L）に Vikenti で出場するというプランでした。3週目のネーションズカップは国別対抗団体戦で、翌年の世界選手権と2020年の東京オリンピックを見据え「チームで戦う」という意識を高めることが最大の目的で、大岩義明選手と北島隆三選手と私の3人がチーム

を組んで参加することになり、私にとっては初めての“TEAM JAPAN”の一員としての競技です。

9月9日～10日の CIC2\* は Utopia との3回目の競技でした。2週間後のネーションズカップに出るためにはここでクオリファイする必要があります、もしクオリファイできない場合は別の馬でネーションズカップに行かなければならず、今後のプランが変わってしまうという状況でした。クオリファイが最優先事項だったので、クロスカントリーで何秒タイムオーバーしたとしても障害減点0で帰ってくることに集中して走行し、無事にクオリファイすることができました。

翌週、9月14日～17日は Vikenti との CIC3\* です。出発前に Utopia の歩様が思わしくなかったため、場合によっては翌週のネーションズカップは Utopia ではなく Vikenti で行くことになるかもしれないという状況で競技に臨むことになりました。Blenheim Palace という宮殿で行われるこの大会は歴史が古く、イギリスの中でもメジャー大会の一つに数えられる大会です。私と Vikenti が出場したのは8歳・9歳の馬のチャンピオンを決める競技で77頭が参加していました。馬場馬術では自分では会心の演技とまでは感じていなかったのですが、2日間が終わった時点で首位に立っていました。2日目の障害馬術では準備運動からこれまでにないほどの好感触で、自信を持って走行した結果、減点0でゴールして2種目を終えて首位をキープすることができました。



▲ Blenheim Palace の会場。左奥に見えるのが宮殿。右側が馬場馬術用のグラスアリーナ

しかし、このタイミングでやはり Utopia の歩様が回復せず、ネーションズカップに出場できないことが確実になってしまったのです。ネーションズカップには Vikenti か Tacoma のいずれかで行かなければならないのですが、Tacoma はネーションズカップ翌週の CCI2\* を予定していたため、2週連続の出場は無理なので、Tacoma でネーションズカップに出るなら、翌週の CCI2\* はキャンセルせざるを得ません。しかし、この競技は世界選手権に出場するための権利をクオリファイするために必要であり、ここを逃すとクオリファイのスケジュールに大幅な遅れが生じてしまいます。残された選択肢は Vikenti しかなく、そのためには今回のクロスカントリーを棄権して翌週のネーションズカップに備え

なければなりません。苦渋の選択でしたが、William に事情を説明して、この競技を棄権すると伝えました。しかし、その夜、William に「この Blenheim というメジャーな大会で2種目を終えてトップに立ってクロスカントリーを走るの、誰にでもできる経験ではない。ましてや見知らぬ日本人が世界のトップライダーと戦っていることで、皆が君の走りを楽しみにしている。これはまたとないチャンスだ。日本チームには申し訳ないことになるかもしれないが、ネーションズカップのことはこの競技が終わってから考えよう。僕の意見を踏まえたうえで一晩考えて、明日の朝、君がどう感じるかで最終決定をしよう」と言われました。その言葉を聞き、私の気持ちは決まりました。翌朝「Vikenti と走りたい」と告げ、改めて状況を整理して、もしどこかで拒止があったらそこで棄権し、ネーションズカップに行くと決めてスタートラインに立ちました。

清々しい気持ちでスタートし、コース前半はスムーズに走行していたのですが、私の前の出番の人馬が落馬してしまい放馬した馬が捕まらず、私は6番障害を飛越後にホールディング（コース上でトラブルが起きた時に、審判員によって走行の中断を命じられること）となっていました。クロスカントリーでは時々起こることで、過去にも経験がありました。ホールディング中は計時は止められ、再スタートの際に計測も再開するのですが、スタートの場所は審判員の判断によるもので、必ずしも選手がホールディングに気付いてスピードを落とした場所とは限りません。そのような場合は数秒の遅れが生じてしまうこともあります。また、身に着けているストップウォッチも正確なものではなくなってしまうため、ホールディング後は自分の感覚だけで走るようになってしまいました。全人馬が走行を終えて発表された結果は、私と Vikenti は1位とわずか0.1点差の2位でした。減点0.1はクロスカントリーのタイムにして1秒もありません。この結果を見た時は愕然とし、「馬場があと1点高かったら。あと1秒早くゴールしていたら」という気持ちになりました。しかし、ホールディングがあって馬が休憩できたから最後まで体力が十分ある状態で走行することができた、ストップウォッチが無効になったことで余計なペース配分を考えずに全力で走るしかなかった、と考えることで、あのホールディングがあったからこそ0.1点差の2位にとどまることができた、と前向きな気持ちでこの出来事を受け止められるようになりました。

「走るべきだ」と言ってくれた William には本当に感謝しています。彼の言葉がなければ、このような素晴らしい経験はできませんでした。この大会で何度も栄光を味わい、人一倍この大会の重みと価値を知っている彼だからこそその決断だったのだと思います。

翌週のネーションズカップは Tacoma を連れて行きましたが、結果的に、私より先に走行した日本チームの人馬が失権してしまい、その時点でチームとしての成績が不成立となったため、私と Tacoma はクロスカントリーを棄権して翌週の CCI2\* に出場し、無事にクオリファイすることができました。

## ❖ オフシーズンに向けて

総合馬術に転向して2シーズン目が終わりました。今シーズンの最大の目標であった世界選手権の出場基準クリアを達成できず最後の競技会は残念でしたが、シーズン全体を振り返れば大きく前進することができたシーズンだと感じています。世界的なトップライダーである William から騎乗技術が学べたことはもちろんですが、馬のケアに関する知識や、大きな競技会で失敗しないための準備など、多くを学んだことで自分の引き出しが増えました。また、友達が増えたことも大きな収穫でした。競技会で友達がいれば、タイムテーブルの変更やコースのポイント・感想を聞くこともできますし、単純に冗談を交えて笑ってリラックスできる時間を過ごすことができます。これは大きな競技会ではとても大切だということを実感しています。

ここからしばらくはオフシーズンに入ります。Fox-Pitt Eventing ではそのシーズンの競技が終了した時点で獣医検査を受け、腱に異常がないことが確認できた馬から蹄鉄を外し、馬着を着せて昼夜放牧を行います。よほど天気が悪い日以外は厩舎に入れることはなく、1頭で寂しがらないように複数で放牧しています。これは、人間からの指示やプレッシャーから馬を解放し、身も心もリセットさせて、馬が馬らしさを取り戻すことが大切、という William の考えによるものです。

広大な放牧場ののんびりと歩きながら草を食べている馬たちを見ると、自然と「頑張ってくれてありがとう」という思いがこみ上げ、「ゆっくり休んで、また来シーズン一緒に頑張ろう」という気持ちになりました。

2018年はいよいよアメリカで開催されるトライオン世界選手権です。シーズン序盤は出場最低基準の獲得がメインで、中盤からは世界選手権を見据えて活動していくことになります。私にとって大きな目標の一つである世界選手権。その舞台に立つために、シーズン初戦から確実な走行ができるよう準備を進めていくつもりです。



▲のんびりと放牧を楽しむ Vikenti と Tacoma